

日本近代文学館所蔵 ——『富士』「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」——

藤原崇雅

解題

武田泰淳（一九一二・二一—一九七六・一〇）は、はじめ中国文学研究者として活動し、戦後は埴谷雄高や梅崎春生らとともに第一次戦後派の文学者として認知されていく人物である。本稿では、泰淳の代表的長篇である『富士』の草稿類と、未発表作品の一部と考えられる「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」を翻刻・紹介したい。

が、その中には『司馬遷』（日本評論社、一九四三・四）や『快樂』（『新潮』一九六〇・一～一九六四・一二にかけて断続的に連載）など、作家の代表作として名高い作品の成立に関わる資料が多く含まれている。

同コレクションの所蔵は、泰淳文学の基礎研究に大きな影響を与えたといつてよい。コレクション公開までは、川西政明「武田泰淳の祖先」（『群像』二〇〇三・一〇）や長田真紀「武田泰淳家系考」（『二松学舎大学人文論叢』一九九四・三）など、僧侶の家系に生まれた作家の出自に関わる論考が多かつた。しかしコレクション公開以降は、石崎等『盧州風景』の成立（『日本近代文学館年誌 資料探索』二〇〇六・九）や井上隆史「武田泰淳『司馬遷』の成立」（『日本近代文学館年誌 資料探索』二〇一二・三）など、コレクションの資料を参照することで、作品の成立過程を明らかめる研究が発表されている。本稿は、先行論のうち後者の流れ

を汲むものである。

つぎに、数ある資料の中で副題に掲げた一点の資料を探り挙げた理由について述べる。座談会「あさって会のことなど」〔文芸展望〕一九七七・一で埴谷雄高が「富士」は最後まできちんととした傑作だ」と述べているように、『富士』〔海〕一九六九・一〇・一九七一・六は作家晩年の代表作として高く評価されてきた。ただ、その成立過程については、管見の限り論じられてこなかつた。⁽¹⁾ 本稿では日本近代文学館蔵の資料を紹介することによって、以上の研究状況をささやかながらも更新したい。

また、『富士』では精神病院が舞台となつてゐるが、泰淳がその他の作品においても精神病を創作の題材としていたことは、あまり知られていない。作家が精神病を題材として描いた作品群——「幻聴」〔新潮〕一九五二・七、「動物」〔文学界〕一九五四・二)、「ゴーストシップ」〔週刊朝日別冊〕一九五五・二)、「鶴のドンキホーテ」〔新潮〕一九五八・一・三)、「物語」「弱き夫」〔朝日ジャーナル〕一九六三・四・二二)など——は研究史において看過されてきたのである。原稿「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」は、タイトルの通り、精神病患者が登場する。そのような内容をもつ草稿の公開は、作家の精神病に対する関心を論証する資料として貴重であろう。⁽²⁾

それでは、最後に資料別の解題を述べたい。本稿で紹介する資料は次の八点である。なお、(1)～(7)は全て『富士』の

草稿であり、武田泰淳コレクションにおいては同一の資料番号で整理されているが、調査の結果、七種のものが含まれていることが分かつたので、便宜的にAからGまでの区別を設けた。

(1) 『富士』草稿 A 「ノート①」

(コクヨ原稿用紙 20×10、ペン書き、1枚、資料番号 T
0 0 5 6 7 9 8)

(2) 『富士』草稿 B 「題不明」

(コクヨ原稿用紙 20×10、ペン書き、8枚、資料番号 T
0 0 5 6 7 9 8)

(3) 『富士』草稿 C 「題不明」

(コクヨ原稿用紙 20×10、ペン書き、1枚、資料番号 T
0 0 5 6 7 9 8)

(4) 『富士』草稿 D 「題不明」

(コクヨ原稿用紙 20×10、ペン書き、1枚、資料番号 T
0 0 5 6 7 9 8)

(5) 『富士』草稿 E 「草をむしらせて下さい。」

(コクヨ原稿用紙 20×10、ペン書き、4枚、資料番号 T
0 0 5 6 7 9 8)

(6) 『富士』草稿 F 「草をむしらせて下さい。」

(コクヨ原稿用紙 20×10、ペン書き、4枚、資料番号 T
0 0 5 6 7 9 8)

(7) 『富士』草稿 G 「題不明」

(岩波書店原稿用紙20×10、ペン書き、20枚、資料番号T
0056798)

(8) 「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」原稿

(高知堂製原稿用紙24×25、ペン書き、3枚、資料番号T
0056515)

(1) 署名なし、ページ番号なし。成立時期は不明だが、「ノート①」と書かれていることから、創作ノートだと考えられる。

内容は前半と後半、括弧のついていない部分と括弧つきの部分に分かれている。前半の部分は、靈安室にこもつていた大木戸夫人が、すでに亡くなつたはずの一条から伝書鳩を渡されたと主張する一八章の場面についてのものだと捉えられる。後半の部分は、「一条の第一の手紙」とあることから、一条実見からの手紙の一通目が引用される、八章の終盤から九章にかけての部分に関してのものと考えられる。

(2) 署名なし、ページ番号あり。登場人物「おれ」の富士山に対する抽象的な思考が展開されている。ただ、初出において草稿Bが活かされた箇所は確認できいため、創作の過程で削除された部分であると推定される。

(3) 署名なし、ページ番号なし。登場人物「九鬼」について書かれた部分で、彼が女性から非常に人気のあることが記されている。初出において、女性から高い人気を得ている

のは、宮様を自称する「嘘言症」患者の一条である。「嘘言症」のことは書かれていないため断定はできないが、草稿Cからは一条がもともと九鬼という名前で形象されようとしていたことが窺えよう。

(4) 署名なし、ページ番号なし。初出において草稿Dが活かされた箇所は確認されない。ただ、初出においてはヤスパー・マリー・ボナ・バルト、斎藤茂吉など、ドイツやフランス、あるいは日本の理論が引かれているのに対し、草稿Dでは「アメリカの医術」についての言及がある。泰淳はドイツやフランス、日本の理論以外に、アメリカの知見をも『富士』に取り込もうとしていたのかもしれない。

(5) 署名あり、ページ番号あり。港博士と神西女史という登場人物の会話。女史に相当する人物は初出において登場していないため、創作の過程で削除された部分だと考えられる。ただし、女史に語りかける港の発言は、初出の七章ほかで述べられる甘野院長の発言と似たものである。作品成立にあたつて、女史の存在は削除され、港は甘野という名前に変更された後、登場人物として形象されたと考えるのが妥当だろう。

(6) 署名あり、ページ番号あり。前半部分と後半部分に分かれている。前半部分には、「二十三歳の青春」という言葉が確認できることから、この草稿は実習生・大島の内省が記されたものであることが窺える。後半部分は、夢につい

ての言及である。ただ、初出において大島の夢は複数回にわたつて書かれているが、草稿 F のような記述は確認できない。

(7) 署名なし、ページ番号あり。今回紹介する『富士』の草稿の中で、もつとも初出に表現が近いもの。初出七章における大島と甘野の対話部分の草稿である。ドストエフスキーへの言及が見られるなど、甘野の発言は初出と同一の箇所も多く見て取れる。ただ、大島の発言に関しては、初出においては火田軍曹への言及などがあり、異同も確認される。

(8) 署名なし、ページ番号なし。プロレタリア文学運動に参加する青年が、精神病患者となつてしまふ物語。管見の限り、同一の筋をもつ作品は確認できないため、発表に至らなかつた作品の一部と考えられる。

凡例

一、挿入、削除などはそれらの記号を残さず、確定した文章を記した。ただし、削除の跡が読解の助けとなる場合は、原文の上に取り消し線を引くことによつて示した。

一、本文のカタカナとひらがなの表記と仮名づかいは、原文のままとした。ただし、促音や拗音については、現在通用している書法によつて翻刻し、たゞえば「つ」ではなく「つ」と表記した。

一、漢字は、原則として新字体で統一し、異体字などは通例の字体に直した。

一、ルビは必要なもの以外、適宜省略して表記した。

一、句読点、傍点、圈点、括弧、改行は原文のまま表記した。一、判読不明の箇所については、一字分を□で示した。また判読が確定できていらない箇所については「」を挿入し、可能性として想定される言葉を補つた。

一、記述の一部に、今日の見地からすれば不適切な表現があるが、当時の時代的背景を考慮し、原文のままとした。

翻刻資料

(1) 『富士』草稿 A 「ノート①」

靈安室にこもつていた大木戸夫人は、夢のうちに一条が、マミヤの鳩をかかえて来て、わたしたと語る。彼女は、たしかに伝書鳩をかかえている。大木戸が廊下を歩いているのを見たといふ者もいる。マミヤが煙突に上つてゐるのを、岡村少年も見たらしい。

(未亡人となつた場合、それでも奸通であるか)

(一条の第一の手紙にかかれてゐる「奸通」は事実であるか。事実であれば、それを中里里江は知つてゐるはずであるか)

(2) 『富士』草稿 B 「題不明」

精神病とフジサン。このかかわりあいは面白いかも知れない。メクラにとつて富士は何物であるか。それを問うとなれば、どうしてもセイシン病プラス富士ということになるからである。「おれの『庭』の中に、人民どもがウヨウヨとむらがついていることを、おれは許すべきか。とんでもない。おれは彼らを、動物園の動物のように飼育して、そしておれの庭のたのしみをゆたかにするように、こころみる。だが、それは決して奴らを幸福に、暮させてやるなんぞということは無関係なんだ。たとえばフジがおれの庭の一部に突出しているとする。それは邪魔者だろうか。この火山の噴火が、おれの庭の秩序をみだすだろうか。そうあらせてはならないのだ。おれは、フジの独自性や立派さなどを、おれの『庭』の中では絶対に許さないのだ。フジはおれの意志にしたがつて配列される、一つの庭石にすぎない。そうでなければ、おれはフジを必要としないのだ。必要なものだけを配置し、必要なないものはきれいさっぱり一掃してしまうのが、おれの造園術なのだ。さて、まずぶつかる難問は、必要、不必要をどこできめるかということだ。一ばん手つとり早いのは、存在するすべては必要であると規定してしまうことだ。あるいは、感覺的に気に入らないものはすべて不必要なりと規定してしまうことだ。だが、存在するすべてとは一体何なのか。感覺的に気に入らないものとは一体何なのか。「月の沙漠」は私の庭に、必要なものなのか、それとも不必要なものなのか。

もしも自分の雲的感覺、庭園術を自分自身で制御、などなど、改革できるならば、何も「庭」などつくれないでも、万事このままでは地球上のすべての凹凸を庭とみなして無為自然でいられるはずなのに、何のためにジタバタするのか。問題は自分の内心、自己のまぼろしのつくりかえであつて、地形のつくりかえではないのではないか。

現存する庭は、南極や北極、つまりキヨクを考慮に入れていない。それでも良いにしても、このキヨクを考慮に入れたニワがよりすばらしいものであるうと、私は恐口「恐怖、恐懼」する。もちろん、内心のつくりかえが明確な形をとりえないと、どうしても外界の対象の自由なつくりかえに依存しなければならないのが実情である。そこへ、そのような、切なる人間の欲望のしみついた、ぬきさしならぬ実情こそ、私の出発点であらねばならぬ。

ニワが表現すべきものは、人間存在の自由であるか、それとも不自由であるか。ニワによつて人間はたしかに、自己を制約する地理的条件、つまり地上の一点にしばりつけられている不自由から解放され、あらゆる自然を掌中におさめ得る自由のよろこびにひたるにちがいない。にもかかわらず、人間がつくり出したすべてのニワは、どうしてかくもキユウクツな形式を甲冑の如く肌身にピッタリと装着させねばならないのだろうか。形式の自由、自由の形式を探し求めて、たどりついたのは結局、不自由きわまる形式の完成だったのである。

全人類の形式。それは、たしかに有るにちがいない。したがつて全存在の形式を発見する、発見したがる欲望が人間をニワに導くことは当然である。したがつて、ニワの本質とは、「形式」なるものとの人間のかかわりあいにあるのである。地球の誕生とともに、形式は、あらかじめあたえられている。それが、一つの前提となりうる。しかし人間は、この全存在の形式なるものを目撲したり感触したりできないので、手さぐりで部分々々に於てたしかめて行く。「形式」が人間にとつて、自由であるか不自由であるか。形式とは人間がその中に包みこまれている「全体」の□□なのであるから、人間は立ち上つた四足獸といふこの小形式によって、地球という大形式と、いやおうなしに結びつけられている。植物と動物とをたべて棲息する人間は、そのような条件によつて、この二つの「自然」

冒險と計算。冷静と情熱が、どのようにして彼の中で調和させていたのだろうか。うまい具合に毒とクスリを調合させることのできる彼ではなかつたにしろ、どんな具合にして彼の中で、組み合わされ、せめぎあつていたのだろうか。そもそも「戦術」と称すべきものも彼は持つたことがあつたろうか、持とうとしただろうか。

彼は、日本の医術とアメリカの医術しか信用できなかつた。

（4）『富士』草稿D「題不明」

（5）『富士』草稿E「草をむしらせて下さい。」

「患者の恋愛について、神西紳さんはどう思いますか。恋愛をする権利は、誰にでもありますね。ですから、恋愛をしていけないはずはない。」

港博士は、いつものように、やさしいやさしい声で、神西女史に語りかけていた。

「患者が愛しあつたり、恋しあつたりするのを、禁止する力はいませんよ。だけど、やつぱり恋愛という行為は、熱のこもつた、はげしいものですからね。神西さんも、観察していらっしゃるでしようし、こちらが観察しようとしないでも、彼らの恋愛の方が、ぼくたち医師に押しよせてくると、そう、ぼくはいつも感じていますがね。」

「…………押しよせてくると、ええ、そうも言えると思ひます。

港先生のおっしゃる意味は……。それは、たぶん、私たちが観察しようとしているでも、あるいは、観察するより先に、と言ふような……」

「そう。正直なところ、精神病院の責任者としては、恥しいけれども、ぼくには彼らの恋愛について、うまく観察する自信がないのでね。観察できないから、それでぼくがなやむとか、

そう言うわけではありません。わからないことは、わからないでも、それでイライラする方ではありますからね。おそらく、患者の恋愛事件について、うまく観察できないでも、ぼくは平気なんでしょうね。冷静でいられると言えば、つごうがいいけれども、ある程度、無関心ですごしていられるわけですから。ですから、何も問題にしなくとも、よろしいのです。ですが、ときどき、もう少し観察したり、分析したり、まあ処理できるようになつてもいいなとは、思うんだな。ぼくは男性だし、あなたは女性だし。それに、あなたには、ぼくには欠けている観察力や理性があるように感じられるのでね。」

(6) 『富士』草稿F 「草をむしらせて下さい。」

精神病者が善人であるか、悪人であるか。また、彼らの頭脳のはたらきは、はたして常人より劣っているものなのか、どうか。そして、彼ら患者たちの犯罪を、病者の犯罪と称すべきなのか、それとも一般的な「人間」の犯罪と申すべきなのか。

これらの、あまりにも根本的な難問を解決するには、私の

体験はまことに、私の研究室間は未熟そのものであり、そしてなにより若すぎる」とを、よく承知しているつもりだ。二十三歳の青春などというものは、精神病学を専攻する学徒にとって、少しも特権ではない。むしろそれは、勝手な理論に飛躍したがる、あぶなつかしい状態を示すにすぎない。

患者は、どのような裏切者になりうるか。何回のどんぐりがえしをなしうるか。実は何、その裏の実は何、そのまた裏の裏は何と言うように、どこまで裏の裏をもちうるか。つまり彼らは、どのあたりまで人間能力の限界として、予定したたぐらみどおりに行動しうるのか。

「夢の中でしか起りえないこと」

ソソナモノハナイ。夢ノ中デ起ツタコトハスベテ、夢ノ外デモ起リウルコトナノダ。それが実際ニハ起ラナイノハ、何モノカニヨツテサマタゲラレテイルカラニスギナイノダ。ソノ「何物」カトハ、コノ世ノイツワリノ「秩序」デアル。

(7) 『富士』草稿G 「題不明」

医長はなぜあんなに、すべての患者にやさしく接することができるのだろうか。私自身もそうありたいと努力しても、できないのに、なぜ院長は生れながらの性格として、自然にそう□□□ようにして、あのような態度をたえず保ちつづけることができるのだろうか。一時的な口先だけではなく、日常の行動の

あらゆる部分を通じ、かわりなくそうありうるのだろうか。

院長は、こう言う。

「それはね。大島君。ぼくだって君と同じことさ。絶対にやさしくありつづけることなんぞ同じ人間だもの、できるわけはないんだよ。ただね。君にも少しは参考になるかも知れないから言うんだけど、一つだけぼくには心があるんだ。我々は、患者たちから誤解されることを怖れたり避けたりしてはいけない。誤解されることこそ、当然なことなんだから、みずからすんでその誤解をひきうけなければならない。だって、我々は常に患者たちを誤解し、そして誤解することによってのみ患者たちに近づいて行くんだからね。自分たちが向うを誤解して暮しているのに、こつちだけが相手の誤解におどろいたり、怒ったりすることはいけない。怒る、腹をたてる、いらいらする、それは我々には許されない。だって、もしかしたら患者たちの誤解こそ、我々に対する負の理解かもしれないんだからね。彼らは我々が自分自身では理解できていない我々の本質を発見し、教えてくれているのかも知れないじゃないか。いや、彼らこそ、彼らだけが我々を治療し教育してくれる、めつたにない選ばれた人間だと称してもいいくらいなんだ。もしも彼らがいてくれなかつたら、ぼくも君も、人間について何一つ新しい、今とはちがつた観点に立つことなんぞ不可能になるはずだらうし。彼らが我々をひきよせるのだ。我々が彼らがをひきよせるんじゃないんだよ。なるほど、病院は彼らを集め、彼らを収容す

る。保護する。治療しようとする。だが実は、彼らはでんでんばらばらにこの社会、この地上に存在しているその時からすでに、ぼくらに向つて呼びよせの声をかけていたはずなんだ。いはば彼らは、我々の研究材料になるようそぶり、見せかけをしていながら、ほんとうは我々の精神的実質を根本的に改めるために、つかわされてきた使徒のようなものなんだ。彼らは全く、うんざりするほど明確鮮烈なやりかたで、我々に我々自身の本質を突きつける。いくらこつちがいやがつても、そのやり方で眼が痛くなるほど、こつちを目ざましてしまう。目ざましてくれずにはおかない。そんな残酷な、強力な攻撃者に対しても、ぼくらがやさしいやり方で、接することなんぞ、ほとんど不可能なのだ。だから、根本的には、ぼくらはやさしくなんぞありはしない。だが、それでもぼくらが、やさしげな態度を唯一の戦術とするのは、彼らが絶対的に存在している、そのためなんだ。絶対的に、充满するかたちで厳として存在している、しかかもそれをぼくらが異常者としかうけとれない状態で生きつづけている。正常者の息の根までとめかねない堅固さで、はつきりと場所を占めてしまつて、彼らと接近して、一体どんな態度が正しいと決められるだらうか。したがつて、もしひくらにやさしさが表現できるとして、それは全く、向うがいやおうなくそうさせてしまうだけなんだ。決して、こちらが自発的に意志の力で、そうできているわけじゃないんだよ。患者たちに、身も心もまかせてしまう。極端に言えば、そうなるかもしれない。」

「……それほど患者が絶対者だとすると、患者が上位にあります、患者が一方的にはたらきかけてくる。患者が『動』であつて、ぼくらは『反動』にすぎないということになるんでしようか。もし、そうだとすると、ぼくらを守つてくれるやさしさといふのは、患者の手でぼくらに著せられた拘束衣のようなものになつてしまふのじやないでしようか」

「君のその反問は、もつともだと、ぼくは思うよ。ぼくだって毎晩、その反問を自分でやつては、解決のつかない壁に向いあうことだつてあるのさ。もちろん、彼らは患者であり、ぼくらは医師である。この区別をあいまいにするわけにはいかない。人間は誰でも精神病患者なんだという議論くらい、甘つたれた、いやらしい、ずうずうしい言い方はないからね。それは、君だって、わかつてくれるだろう。ぼくが理性ある医師としての任務と責任を、それほどこまかし口かいでいる男でないことはね。君が『やさしさ』について質問してくれたから、今、何とかして少しでもわかりやすく説明しようとしているだけなんでね。」

「ぼくはただ、ぼくがやさしくなれない瞬間が、あまりにも多すぎるもんで、やさしくなりつけられる先輩が、うらやましく感じられて、それで質問しただけなんで、……。この患者、こいつは一体何物なんだ、いくらなんでもこいつがぼくと同じ人間として権利を主張したり、ぼくたちをバカにしたり白眼視したり敵視することを、こつちは我まんしていなくちやならないのかと、腹が立つてくることがあるもんですから。やさしく

しなければならない、先生の言はれた通り、戦術としてもやさしくしなくちやならないと決心はしているんです。ですから表面的にはある程度まで、それができるんですが、内心では、こいつら生れていてくれない方がいいなと思うことだつてあるんです。そんなときは、一体自分には、本心から彼らの生存を願つてはいるのか、それとも彼らの消滅を心のどこかで望んでいるのか、わからなくなるんです」

「君の言うのは、患者全部のことじやないだろう。一部についてだらう」

「……ええ、そうです。ですが、やさしくできるとすれば、患者全部についてでなくちや、いけないとと思うんで」

「そうなんです。一部ではダメなんだ。全部についてでなくちや、ぼくらの責任がはたせないことになるからね。えこひいきなく、患者全員に対して……。大島君、ぼくだって、それができないことは、よく知っていますよ。君だって、ぼくを觀察していれば、ぼくにそれができていないことは、よく見抜いているにちがいないんだ。ああ安易で、無責任な、全人間総精神病者論には、ぼくはあくまで反対します。しかし、全部の患者に對して平等にやさしくありえない精神病院長として、ぼくは自分が一種の患者ではないか、いや、疑いなく患者そのものだと感ずることがあります。それほどニヒリストイックなデスパレートな感じ方ではなくて、冷静に理的にそう自分に言つてきかせることは、ひそかにあります。異常な精神病患者を収

容する、国家施設の責任者である自分の正・常性が、はなはだあぶなつかしい、矛盾のかたまりのようには感ぜられてくることだつてあります。だが、よくよく考えてみると、患者が医者であるという真理を立証し、しかも患者という仮面をかぶつて生きているようにして、それと寸分のちがいもなく、私もまた私で国立保養所の院長として生きているという真理を立証し、その仮面をかぶつて生きつづけていることになります。彼らも私も、その真理と仮面から脱け出すことはできない、脱ぎ切ることもできませんよね。患者がいる。医師がいる。それはふつうの内科、外科の場合は当然すぎるほど、当然なことです。しかし、精神異常患者の世界にあつては、患者と医師が同時に存在している、そのことがもともと対立であり矛盾であるのかも知れないんだからね。人間社会には、言うまでもなく、対立もあり矛盾もある。だが、その矛盾と対立とは全く別種の矛盾と対立によつて、ぼくらと患者たちが結びつけられていると、言つて言えないことはないんだからね。気持ちがいになるぐらい考へつめなくちやならない難問が、この世にはある。しかし、いわゆる気持ちがいの世界において、気持ちがいになるぐらい考へつめるという、そのきまじめな態度は一体、正常なのだろうか、それとも異常なのだろうか。いやこういうペダンティックな、先走りのすぎた言い方は、やめよう。後輩たる君のまじめな気持を、ちよつとでもかきみだしくないからね。はつきり申し上げておくが、ぼくはごく平凡な職業人です。およそ天才とか聖者

とかいう種別の人種とは、千里もへだたつた、ありきたりの社会人です。ただ、いくらかふつうの社会人、職業人とちがつて、いる点は、たまたま彼ら患者たちに呼びよせられてしまった人間だということです。呼びよせられてしまったことに、危険を感じるほど、ぼくは正常な安泰を求めていた人間にすぎないんだ。君も、ドストエフスキイの愛好者らしいが。ドストエフスキイの『カラマーチフ兄弟』の、あのゾシマ長老。あのアリヨーシャという宗教的美青年は、あのゾシマ長老が、すべての難問題と直面し、それと斗い、それを解してしまつて、いる大先輩として、彼を尊敬していただでしよう。学僧アリヨーシャの師に対する至誠、熱意、信頼は、読んでいて涙がこぼれてくるくらい感動するものだ。だがねえ、大島君。わが精神病科の医学者のあいだで、師と弟子のあいだに、あのような美しい信仰のかなしみと喜びが生れうるとは、実に口おしいことだが、ありつこないとぼくも君も信じているのではないだろうか。それは、資質、一生それから逃れられない相手が、ギリシア正教の信徒や非信徒ではなくて、困つたことに精神病患者であるからではないだらうか。だから、もしも君やぼくが、とうてい不可能ではあるうが、一種のやさしさをもちつづけるとしたら、それはあのゾシマ長老や宗教青年アリヨーシャのやさしさとは、全くちがつてやさしさでなくてはならないはずだ。そのやさしさとは、何だろう。それはうまく答えられないからと、言って、それが私た

ちの罪だろうか。

(8) 「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」 原稿

埃のかかつたつづちの赤い花は同じく埃のかかつた葉にひつかつたやうについて居た。赤松は、細く立つており影が土の上へのびておつた。まづい洋画の色彩は現実の世界においても同様に数限りなく見出された。だがだれも、元気の良い人々にはこれららの哀れな色彩に目もとめなかつたが、悲觀もしなかつたにちがひない。太陽が出ると空が青くなり、雲や鳥が飛ぶので誰も、一時的に満足してゐたかも知れない。高等学校の校庭はその日、太陽が暖かそうに照つてゐたが不幸そうな姿をした学生が一人ゐた。彼は赤松や、くぬぎや、枯草をみすてて、角ばつた影にみち／＼た、二階の教室で机にもたれて斜になつてゐた。やせた赤くない顔と手でもう彼は軽べつされるかもわからぬ。その上彼は一生懸命字を読んでゐた。彼はそれでも足に下駄をつっかけて時々それをガタ／＼いはせてゐたが。かれの読んでゐる紙片には次の様にかかれてゐた。

「文学は芸術であるとは一体、眞であるか。己は之を疑ふ。文学が芸術なる為には少くとも芸術に特有の脈搏をうつてゐなければならぬはずだ。そのミヤクハクこそは音楽にも、舞踏にも絵画にもあふれんばかりにおどつてゐるのだ。併しながら現在我々のなしつつある、ホームの文学には何パーセントの芸術的な飾りをつけていたが、そのひさしの真直ぐな横の線も同じ

ラッパだ。絵画としたら活動の看板だ。」子供らしい芸術論と笑つてはいけない。彼は此の学校のプロレタリヤ文学の青年作家の集団の一員になりたての人間だつた。勿論、文学の探究のための道としては誠に恐しいトンネルであつた。欺瞞の煙はうづまいて、彼を窒息せしめたではないか。この学生は今、此の集団が首長としてあほいである或る力の強い文学青年とこの論文について、喧嘩をしてきたのであつたが、別に血の氣ものぼらぬ風に頭をふつてゐた。そして時々前頭部をなぜたが一寸赤い液体が指にそまつた。相手は文芸家としては力がありすぎたのである。鳥が窓に影を投げたので学生は立上がりてその紙片を破いて啖壺の中に、にらんで、張りのない肺の上をポンと片手でたたいて教室を逃げ出した。

二日ばかり立つて彼は又なぐられてしまつた。枯草の上へころがされて彼は、死にそうな母を思つた。勿論無抵抗だつた彼は血を出して立ち上つた。彼は「同志を裏切つた」そうであつた。併し彼は「己みたいな、力のないやつを問題にして呉れたのかな」とそれだけを感激して黙つてゐた。

秋、高くなつた天はあんまりまぶしいので、黒い土を見て下をむいていると、馬が強くいなないた。彼はかへりに電車の中で、セルの着物を着た男を見た。日光が、その着物と肉体との両方へ当つて明るい輪郭をとり、すべての線は力強かつた。そして頭にはカン／＼帽といふあの一般

く正置物の力強さがあつた。鼻も黒い影をつくつており、ほほも、真直な傾斜をなしており、その上、全集物の真四角な白い表紙を真直な膝の上へおしつけてゐた。彼は、その男のこしかけてる緑色の、腰かけと窓の外の通過する雑色とで画を心の中でつくつてゐた。併し彼の下りる一つ手前の停留所でその男は驚く車掌を後にして、只乗りをして逃げていつた。

五日たつてその学生は郊外の気違ひ病院へ入れられた。僕は

彼を疾走する電車にのつて訪ねた。多くの精神病者はテニスや野球をしてゐたが彼はやつぱり黄色い室でツクネンとしてゐた。院長にきくと、『とても駄目ですよ』といつて光るメスで彼の鼻の腔をめくつて見せた。僕はかへりがけに精神病院の垣根はからたちの花でできているのがわかつた。僕は彼が氣がちがつて、この病院に入ったのを残念におもつた。もしかれが正氣でゐたら、恐ろしい顔で北原白秋氏を呪つたらうに。それから、電燈がついてから僕は、「あーあいつは恋なんかしないで終つちやつた。あんな美しいかほをしてゐて女性を知らなかつたなんて、近代的物語りなんて、みんな殺風景なもんだ」とくやしがつた。

注

(1) 野口武彦「現代小説言語の諸問題」(『小説の日本語』中央公論社、一九八〇・一二) では、『富士』八章の原稿が図版として挿入されている。この原稿は日本近代文学館に所蔵がない。野口の著作は

『海』を発行していた中央公論社から出版されているため、同社がその原稿を有しているとも想定されるが、現在のところその所蔵先は不明である。

(2) なお、武田泰淳コレクションには、本稿で紹介した草稿類の他にも、「精神病理学」に言及した題不明の原稿(原稿用紙20×10、ペン書き、2枚、資料番号T0056762)が存在する。

【付記】草稿の公開に当たつて、泰淳のご息女である武田花様や、その所蔵館である日本近代文学館より、格別のご配慮を賜つた。また資料の調査・閲覧に際して、同館の小川桃様・西村洋子様に大変お世話になつた。各館・各氏に、心より感謝申し上げる。